
厨二病魔法少女

五月雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二病魔法少女

【Nコード】

N9769W

【作者名】

五月雨

【あらすじ】

厨二病真つ最中の痛々しい少女たちが世界を救う話かもしれない。
(注：厨二病とは、思春期の少年少女にありがちな自意識過剰やコンプレックスから発する一部の言動傾向を小児病とからめ揶揄した俗語である。伊集院光がラジオ番組『伊集院光のUP・S 深夜の馬鹿力』の中で用いたのが最初と言われている。：wikiから)

厨二病魔法少女 (前書き)

雨が降る街。

どこからかポエムが聞こえてきませんか？

それは厨二病のあいつかもしれません。

厨二病魔法少女

不機嫌な雨音に踊らされている紫陽花の葉

窓から眺めるコスプレ少女

イタいポエムを口ずさむ

彼女の名前は滝川たきがわ 昂

実は魔法が使える（自称）

実は地球を救うために未来からやってきた（自称）

実は使い魔が行方不明（自称）

実はフィアンセがいる（自称）

魔法少女（笑）の昂（本名はサンドリヨン：自称）

地球侵略をたくらんでいる魔物から皆を守るべく日々魔法の練習。

独り言が激しい。

「はぁーあ。雨、やんでくれないかなあ。じゃないと、サーちゃん

怒っちゃうぞ！」

は？って言いたくなるけどこれ、日常。

いっておきますが昂の部屋には今昂一人ですから。

そしてちなみにいっておきます。

この物語には

昂みたいなイタい奴しか出てきません。

すると玄関のベルが鳴った。

「はぁーい。今行きまぁーす」

ゴスロリの衣装に家の中で片時も手放さないステッキ

ルームシューズがとつてもキュート

形のいい足にまとわれたニーハイ

え

そのままでのん？

いいんです。

だって

「サンドリヨンー！今日こそwsの決着をつけようではないか！」

「わあ！マミちゃんだ！wsはもういいの・・・あの惨劇は、もう繰り返したくないの。」

おおはし
まみ
大橋 麻美

こいつも中二病

ピンクのロリ服で、フリルのついたピンクの parasol

ピンクのニーハイ、ヘッドドレス

肩から提げた熊のポーチには、飴とおもちゃのピストル

嗚呼、痛々しい・・・

「ws、それは世界を巻き込んで行われた大戦争・・・地球外生命体サデューとの戦いは300年ものあいだ続いて、私たちが生まれ たその日、奇跡の力で戦争を終わらせたのよね。」

「ええ。ところで、三人目の魔法少女はどこへ行ってしまったのかしら。ws以来、姿を現していないみたいだけど。まさか、あの光とともに空へ・・・!?」

「そ、そんな残酷な・・・って。で、マミちゃん、何の用事？」

「あ、そうだった。えつとねえ、仲間にならない？明日wsのサデューが襲ってくるんだよ。るみが言ってたから、ホントだよ。」

「え、るみが？じゃあ、るみも一緒？」

「うん。」

「じゃ、仲間になるよー！」

この日交わした仲間の約束が、世界を本当に救う事になるとは

・・・

やっぱり思えないよ。

続く

厨二病魔法少女 (後書き)

続くけど今後もこういうノリ。

世界を救うかもしれない(前書き)

前作の続き。

雨のやんだ街。

どこかから歌声が聞こえてきませんか？
それは、やっぱりあいつらでしょっね。

世界を救うかもしれない

雨がやんだ町並みにひとときわ目立つ3人組。
中2少女が並んで歩く。

滝川 昴、大橋 麻美

そして今回から登場、「るみ」こと

桜庭 留美

この人の紹介をします。

前作に出ていた二人のようなコスプレ少女ではありません。
とつても物静かで、頭もいいいい子です。
でも

自分は黒魔術が使えると信じきっています。

そういうわけで、3人の厨二病少女がそろいました。

wsのサデュー・・・なんだそれ。

まあいいや。

はじまりはじまり。

アニソンを歌いながら町を練り歩く3人組。

いや、歌ってるのは2人だけ。

ゴスロリ、姫ロリ、黒マント。

奇妙。

でも今からおこる事を知っているのはこの3人だけなのです。

まさか、世界の平和を守るのがこの3人だとは・・・

思えない。

秋葉原の町並みにでた3人は、すでに空気になじんでいる。
どこにでもいる。

たまにすれ違うコスプレ野郎たちは、皆知り合い。

メイド、警察、アニメキャラその他続々・・・

昔の日本刀や手裏剣なんかを売っている店まで来た。

店内を物色し始める。

あれこれ見て回って買うと決めたものは、

『沖田総司の愛刀・清光』 『全自動型拳銃』 『拳銃のカードリッジ』

まあ、清光以外はおもちゃなんだろうけど。

清光はレプリカ。

でもホントに切れるらしい。

買出しを終えた3人。

街を練り歩く。

曲がり角。

「・・・まっつて」

るみが、2人を止めた。

「この先に・・・何か・・・いる・・・」

「・・・ホントね・・・？」

「・・・ええ・・・」

清光と銃を手にして、

昴は、清光とステッキ

麻美は、二丁拳銃

留美は、黒魔術の呪文の本

各自、武器をもって構えた。

飛び出した。

「・・・!？」

そこに

いた

サデュー

想像上の生物

私の脳内にしか存在しないはずの・・・生物。

「なに・・・コレ、夢・・・？」

怯える2人に対して、るみがはつした言葉

「・・・燃えろ」

炎が上がる

「ええええ！？」

サデューが燃えている・・・？

大炎上しているではないか！

問題発言後の2ch以上に！！

ええええ！？

続く

世界を救うかもしれない(後書き)

燃えた

やっぱりムリかもしれない(前書き)

どこかから炎が上がっているよ。

それはやっぱり厨二病のあいつらかも。

街を練り歩けば見つかるんじゃないかな？

やっぱりムリかもしれない

目の前には赤い炎。

何が起こったのかわからない麻美と昴。

留美がいった。

「・・・魔法少女なんじゃないの？だったら早くその武器で・・・」
その瞬間、炎が静まって動き出したサデューが襲い掛かってきた。
「るみが、危ない・・・！」

「るみ！」

手に持っていた刀を振り翳す。

鞘が宙を舞って

地面に落ちた瞬間

サデューに清光が刺さっていた。

昴は驚いた。

どうしてこんなに高くジャンプできるのだろう。

そして、サデューに突き刺さった刀から伝わってくる感じた事のない感触。

そのサデューだって、私の考えたでたらめのはずなのに・・・
すると目の前にいた怪物は、煙になって消えてしまった。

ちやりん

何かが3人の前に落ちた。

青白く煌く気体と、外国製のよようなコイン。

「え・・・倒した、んだよね？」

留美に問いかける昴。

「うん。助けてくれてありがとう。」

「あれ・・・ここ、どこ？さっきの暗い路地裏じゃないわ・・・」

みるとそこは、まるでアニメのなかのように輝く町並み。皆がコスプレ、というよりそれで正装のようだ。

留美のような服のものも、昴や麻美と似ている服を着ているものもいた。

「ここは、裏側。私たちの暮らすせかいの裏側。」
どうして知っているのかなんて・・・

「あ」

昴は思い出した。

走馬灯のように駆け巡る記憶は脳内をくすぐる。

昴と留美は昔から仲が良かった。

幼稚園での出来事だった。

「ねえ、すーちゃん？」 昴に駆け寄る少女は留美。

「なあに？るみちゃん」

その日だ、サデューを知ったのは。

「るみねえ、さつき見ちゃったの。」

「なにを？」

「サデューっていうんだって。wsで、地球を滅ぼしに来るのよって、女神様が言ったの」

「なにそれ？サデューってどんなの？」

こんなの、といって画用紙に描く留美。

大きな怪物が、私たちを食べている。

「こわあい」

大げさに驚いてみた。でも、ホントは信じてなかった。

「じゃあこんなのもいるの？親分みたいなの」

大きくマルを書くと、そこになるべく怖そうな顔をかいた。

「うーん、こんなじゃないけど、いるみたいだよ？」

「そうなんだ、こわいじゃんそれ！」

「いずれ私たちが倒さなきゃいけないんだって。じゃあ魔法を練習しておかなきゃ」

あの時から留美は、未来をつむぐ女神と話ができた。
どうして信じてあげなかったのかな。

続く

やっぱりムリかもしれない(後書き)

(昴)「女神様ってどんな人なのー?」

(留美)「すっごく大人できれいなんだよ。」

(昴)「モテてるの?」

(留美)「うん。大人だから。」

ちいさいころから厨二病

どうしてだろう(前書き)

ほら耳を澄ましてごらん。

どこかから裏切りの歌が聞こえてくるよ。

ああ、あいつらだ。

どうしてだろう

その日に限って、話す話題がなかった。

メイトに新作入荷とか

コミケが来月開催だとか

読んでた漫画最終回だよとか

あのアニメセカンドシーズンやるんだって
とか。

まみが、もう放心していた。

「ああああああ．．．あああ．．．」

なんて呟くだけ。

話しかけても会話は成り立ちやしない。

「ねえ、まみ？」

「そうねえ。。。」

「あ、あのさ、今度するコスプレって．．．何のキャラにする？」
ミケの．．．」

「ああ、やっぱり．．．そうしょうか」

「．．．」

何が起こったかいまだに理解をしていない．．．

サデューはまだ、人間界にさほどいないらしい。

ちよっとだけ、はみ出てるかんじ。

でもやっぱり、いることに変わりはない。

サデューとの対戦から帰ってくるコス仲間が、怪我をしていた。

「ど、どうしたの、大丈夫．．．!?」

「ああ、すばちゃん．．．もう．．．駄目か、も．．．」

カクン、と頭をたれて、気を失った。

「え？ちよ、だいじよ「邪魔！！！どいて！！！」」

その子の仲間だろうか。

すごい剣幕だ。

そりゃあそうだ。

仲間が死にかけてるんだから。

でも、血が出ているわけではなかった。

いふならば無傷。

でも

頭上に表示されるライフポイントは

残り5

赤く点滅している。

すると

チカツと光る瞬間

5

*

4

そう。

少しずつ

減っていた。

ここにたどり着くまでにも減っていたのだろう。

もうそこに彼女たちはいなかった。

道具やに走る少女は、回復薬を買って戻ってきた。

飲ませると、

「あっ」

3

*

63

増えた。

でも、

まだ少女はぐったりしている。

宿屋で寝かせれば治るらしいが、心配だ。

目の前で人が死に掛けていた。

なのにみんな、知らん振りで

パーティーを組んだ仲間しか助けてくれない・・・

人の命を1つのストックとしか考えていないゲームオタク。

そんな奴らに囲まれて、

私には

ココロの闇しか見えなくなっていた。

どいつもこいつも本音はひどい。

「大丈夫だった？さっき攻撃食らってたけど・・・」

（はぁ・・・回復薬無駄に使っちゃったぁ・・・何なのこいつ・・・死ねばよかったのに）

「うん、平気だよ！ごめんね、さっきは迷惑かけちゃって・・・」

（まったくLV1回復薬とか！マジありえないし！瀕死だったのに、ケチだぁー）

「あつ！らいちゃんだぁ！ねえねえ、一緒にボス戦のときのパーティー組まない？」

（こいつキモいくせにレベルたけえし、死んだっていいしww）

「えー？いいよぉー？てかその服かーわーいーいー！」

（うっわブツサイクー！何こいつ！）

私は、小学3年生で交通事故にあった日から、

目を合わせた人のココロの闇が見えるようになった。

ソレはとても不便で

ソレはとても理不尽に、私に突き刺さってくるものだった。

「お、オレ、麻美のことが前から、好きだったんだけど・・・付き合ってくれない？」

（麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美麻美）

「え、えあ、あの・・・ごめんな、さい・・・」

「・・・そっか・・・ああ、じゃあ、これからも友達でいてもいい？」

（・・・ふざけてんのかこのブス・・・マジで何様のつもりだよ・・・）

・)

「・・・うん・・・」

それは、幼い私にはひどく深く突き刺さり、傷跡を残していった。だからといって目を合わせないわけにいかなかった。損をすることばかり。

これで得をしたことも、少しだけあるけれど。

「ねえ麻美ちゃん？どっちの手に飴が入ってるか分かる？当てられたら飴あげるよ。」

（麻美ちゃん馬鹿だから、右少し開けておいたら右って言うだろうなあ・・・）

私は左とிட்டた。
当たった。

「わあ！すごい！じゃあ、はい。飴あげるね。」

（チツ）

「ありがとう」

それに、こんな事もあった。

近所のおじいちゃんが退院してきて、日向ぼっこをしていたとき、遠くから目を見ていると

「・・・」

（近所の麻美ちゃん元気かのお？今度来たときにでも、お小遣いをあげようかなあ・・・）

そんなことを考えているのを見てしまった。

その日の夕方おじいちゃんの前を通る時

「あ、おじいちゃん！久しぶり！退院おめでとうおじいちゃん。」

手に持っていたタンポポをプレゼントした。

「やあ麻美ちゃんじゃあないか。ひさしぶりだねえ。プレゼント？
ありがとう！」

（本当に良い子だ）

「今度また遊びに来るね」

「あ、そうだそうだ、麻美ちゃん。お小遣いをあげるよ。こっちへ

おいで」

(500円くらいあげようかな?)

「え? いいよおおじいちゃん! 退院したばかりなんだから!」

「いやいやいいんだよ。」

(1000円でも足りないようなタンポポをもらってしまったようだなあ・・・)

そして結局おじいちゃんから、1000円ももらってしまった。

私は悪い子だろうか。

でもそれからはずっと不幸続き。

お母さんが

お父さんが

おばあちゃんが

先生が

友達が

信じられなくなってしまった。

だからこんなものも

現実なわけがないんだ。

だから

信じなくていいんだよね?

続く

どうしてだろう(後書き)

信じるって大切だよな。

パーティータイム(前書き)

どこから

裏切りのメロディが聞こえてきた・・・

どこだろうか

どこだろうね

さあ

耳を澄まして待っていて

今行くから・・・

信じて・・・

パーティータイム

『今は忙しいの』

(邪魔ねえこの子は・・・)

『ごめんね今日は一緒に帰れないや。友達と一緒になの。』

(この子嫌いだから・・・)

「あなたの味方よ。」

(・・・)

「本当に?」

「ええ。」

(・・・)

「どうして?」

「それは・・・そうね、あなたを気に入ったからよ。」

(・・・)

「嘘を言うと分かるわよ。」

「どづかしらね。」

(・・・)

「ココロを読めるんだもの。」

「そう?じゃあ、相手に心が無かったら?」

(・・・)

「え・・・」

信じてても、いいですか?

あの仲間は、助かったらしい。

グループの子の必死な看病で、もう無傷。

でもあの日から、麻美の姿が見当たらない。
心配だ。

そう思う反面、少しイラついてたのかもしれない。

そんな敏感で複雑な感情を読み取ってしまうほど、繊細な彼女。みんな、もつと大切にすればいいのに……

「うすいガラスは、割れやすいんだよ……」

「……昂、独り言。」

留美に言われて、心の中の言葉が流出している事に気づく。単純で明確な人間の心。

繊細で複雑で

絡み合ったココロ。

そんなものだって

麻美は感じとってしまふ。

きつと、たくさん傷ついてきただろう。

でも

私はそんな単純なことすら、予想はできなかった。

「麻美、あなたは何になりたいの？」

「私？私……完全な、心の持ち主になりたい。」

「心……ココロっていうのは、いちいち傷つくわよね。私もわかるわ」

「きつと、あなたにも分からないと思う。私の心は見えないからいいんだけど……」

私の過去を話そう。

私は、母親を捨てた。

父もまた、同じように捨てた。

信じられなかったからだ。

ただたんに嫌いだったとか

家庭内暴力とか

そういうわけじゃない。

ただ

信じられなかったから。

信じられない事が多くて・・・
母親は、こういった。

「お外で遊んでなさい。」と。

普通の子供からしたらそれは、

「はい！」

と答えるべき言葉だったろう。
でも

いえなかった。

「お外で遊んできなさい。」

（鬱陶しいわね

）

「え・・・？」

「ほら、行っておいで。」

（ウザい）

「え、ママ？」

そう、ソレが始まりであり、終わりの始まり。
言葉の意味を理解し始めたころから。

「パパ今疲れてるんだ・・・明日にしてくれ」

ただでさえ、傷つく子供もいる言葉。

でも

私にはこう見えていた。

「パパ今疲れてるんだ・・・明日にしてくれ」

（あっちに行け

、うるさいんだよ・・・）

自分を自分で傷つけた。

壁にぶつけてあざを作って

友達に聞かれてこう答える。

「ちよっとぶつけちゃったの」

演技は上手な方だった。

悲しそうな、でもあえて、友達に気づかれないように、というそぶり。

リストカットは、何度もやった。

髪の毛を引き抜いたり

ベッドから思い切り落ちてみたり

知らない葉っぱを食べて、一週間寝込んだり

滑り台から飛び降りてみたり

わざと怒られるような事をたくさんした。

狙い通り起こられた末には、

「ぎゃあああああああ！お母さんがああ！！お母さんがああ

！！！！」

などとやたらと理不尽に叫び、わめき散らす。

マンションの2階のベランダから叫んだ事もあった。

「助けてっ！！！！！！！！！！殺、殺されちゃう！！」

親の留守を見計らっては、盗みを働いた。

ご飯も、飲み込んではいいて、体重を減らした。

自分がぎりぎりと感じたころ

こんな事がおこった。

「幼稚園の松田と申します。ですが、お子さん大丈夫ですか？最近

元気もないし、具合悪そうでも何も食べませんけど・・・あの・・・」

（麻美ちゃん・・・大丈夫かしら・・・虐待虐待虐待虐待虐待・・・

）

「い、い、いえ、何の間違いですか？心配なのはこっちですよ・・・

麻美、最近・・・」

（ああ、なんなんだこいつは、こっちのほうが聞きたいよ・・・）

そう

私が虐待されていると

認めれば

親はいなくなる。

もちろん、私は幸せになれると信じていた。

でも

親がない

それだけで

私の幸せは

本当の幸せ（孤独）は、

うばわれ

踏みにじられ

さげすまれ

崩れ去った。

保護施設に連れて行かれた。

そこには、本当に虐待にあった子供達がいた。

私の入った部屋には、だれも口を開こうとはしない子供ばかり。

そう。

まだ心の傷や体の傷がいていない

愛に飢えている子供ばかり。

目は、

死んでいて

何も訴えかけてこないというより

訴える力はない。

何も感じない。

居心地が最高に良くて・・・

刑期という最大の敵を、考えてはいなかった。

親が帰ってきて

本当のいじめ

本当の、

虐待に遭った。

いままでよりももっと辛いものだった。

もうだめだった。

だめだ

だめ

だ

どうしてこんな目に遭わなければならないのだ

常に背中合わせの悪夢

夏の終わりの涼しい朝がまた、最悪な朝を運んでやってくる。

また、怒鳴り声。

私は

そんな下らないおやどもの発狂、聞くもんか。

その声を聞いた後、わざとあくたいをつく。

外から鍵のかかる音がする。

しめた

そして、トランクやボストンバックに荷物をありったけ詰め込んで

そーっとまどから飛び降りる。

大丈夫じゃなかった。

どうするといいかつていうのも知ってたから、大丈夫だと思ってい

た。

骨折をした。

左足を二箇所。

痛みに泣き崩れそうでも、立ち上がった。

悪夢から逃れたくて。

どうにかして、近くの交番にたどり着く。

「助けて・・・！！！」

それだけで伝わった。

2度目だから。

前回は、五年生で、全身打撲、全治2ヶ月。

今回は、六年生で、左足骨折、全治・・・どのくらいだったろう。

成功した。

親の帰る前に、逃げ出して、

そう、逃げ出して。
悪夢は、私を追いかけるのを辞めたらしい。
面倒だったからかな。
だとしたら嬉しいな。

信じてもいいのは無く、

自然と、

・・・

それと・・・

・・・

誰かなあ・・・

「あなたは親に捨てられたの？」

(・・・)

「いいえ。親を捨てたのよ。おもしろいでしょ？」

「ええ。とても面白いわ。泣けるくらい、面白いわ。」

(・・・)

「あなたは心を捨てないの？私はもう、とっくの昔に売り飛ばしたわ。」

(・・・)

「心を・・・売り、飛ばす・・・？そんなこと、どうやって・・・」
「こっするのよ」

(・・・)

ぐいと、私を引き寄せると

彼女は微笑んで私の心臓の辺りに

腕を突っ込んだ。

ずる、ずる、と、内臓とこすれる音が気持悪かった。

痛みは無い。

「ココロ」を取り出した直後

私は何も無かったかのようにこっ、考えた。

(これを商売にしたら、どれだけ私は楽になるのだろうか。)

「私にその心を返して。」

「どうして？いららないんでしょ？」

(・・・)

「いらない、とは言ってないわ？心の奪い方だけを教えてほしい。なんでもするわ。」

「・・・フフ・・・面白い子ね。返してあげる・・・ウフフ。」

(・・・)

「教えて、くれる？」

「ええ、もちろんよ・・・その代わりにね・・・」

(・・・)

サデューになつてくれない？

「え・・・？」

私の手を握り微笑んだ。

サデューに、なる・・・？

「そう。サデューに、あなたがなるの。私の手で。見た目はかわらないけれど」

「え！？い、今、なな、何もいつてな、あ、ああ、え・・・？」
読まれた！？

「そう。読んだの。読めるのよ。心に深く傷を負うと、たまにそうなるのよね。」

「・・・見た目は、変わらない？中身は？心は？」

「そうね・・・まあ、残してほしいならそのままにするけど、理想の体系とかある？」

「え・・・？そんな事もできるの？」

「身体能力を上げるだけって感じだし、さほどみためはいつでもいいのよ。」

「・・・じゃあ、なんで現れるサデューは、あんなにキモいの？あ

「あなたのしゅみ？」

「え！？そんなわけないじゃない！あれはね、地の底から自然にわいて出る、悪意の塊なのよ。」

人間の悪意がそのまま集まって、形になるの。」

そのうち、もっともっとキモくなるわよ、アレ。」

「じゃあ、人工のサデューって、どうやって・・・」

「ああ、それはね、私の技術。」

「そうなの・・・？じゃあ・・・」

モデルのように、美しく笑われないような体にして。顔も、輝くような美しさに。

心とかは全部、そのままにね。」

麻美は、悪意の塊サデューのボス、ファバロッサに心を許してしまった。

もう遅い。

過ちには、後から気づいて後悔するという特性があるんだ。しってた？

続く

サデュー vs サデュー (前書き)

サデュー

それは、悪の塊

人の心の化身

君の、捨てた心や感情が

サデューとして生き返るんだ。

サデュー vs サデュー

サデューになる

そう。

私は決めたから。

ファバロツサと名乗る女に連れられて、やってきたのは元の世界。

何の代わりも無く、ただいつものように平然とそこに在る世界。

しばらく歩いて、たどり着いたのはただのマンション。高級という感じでも、おんぼろという感じでもなく。

その、一室に足を踏み入れた瞬間空へと

投げ出されたような感覚。

広い広い異次元の部屋へとつながったらしい。

物語に出てくるような、魔女の部屋のようなだった。

「何ここ。気持悪い・・・」

「そう？私はもうなれたけど。」

(・・・)

「へえ・・・で、どうやるの？痛いのか？」

「いいえ、痛くないわよ？麻酔とかってわけでもないし。」

(・・・)

「ふうん」

会話はそこで途切れたけれど

二人の間にはなにか、糸のようなものがある気がした。

絆ほど太くなく、他人というほど細くない糸。

ただ本当に在るのは、不信感と不安感、そして疑問だけだった。

「さあ、このケースに入って頂戴。」

大きな、縦3〜4メートルほどの空のガラスケースを見上げた。

言われるままに、なれない動作でその中に入る。
すると

「じゃあ、コレつけて。あと、服脱いでてねー」

ファバロツサは、そのまま操縦席のような機械の中心に、腰掛ける。

「え、そ、え？服？裸！！？」

「うん」

(・・・)

なにそれ・・・

酸素が送られてくるマスクで覆われた顔半分

少女の裸体

なんだそれ・・・

しぶしぶ服を脱いだ。

「脱いだ？オツケー。閉めるよー。あ、じゃ、マスクつけて。」

口元へ持っていくと、カシヤンという機械音とともに
首の後ろと高等部を押さえつけられる

クッションのようなものが、やわらかい。

一瞬の安心

その瞬間

口の中に

のどの奥に

鼻に

肺に

肺胞に

体中に

深く何かが進んでいくのを感じ

嗚咽

嗚咽

拒否反応

嗚咽

涙
鼻水
よだれ

涙

嗚咽。

苦しい

気持が悪い

今すぐ吐き出してしまいたい。

なぜ？

そんな、

すべりのいい

金属でもなく

プラスチックでもなく

生命体でもない

何かが

体の中へ入り込んできたのは。

残された顔半分にも、また金属音。

水中眼鏡のようなものが顔半分を覆う。

一瞬だったのか、長時間だったのかは分からないが
やっとなんか。

チューブのようなものから、酸素がふきだし、肺へ

二酸化炭素は鼻から、チューブを伝って外へ

そんな動きが始まった。

嗚咽も治まって来たころ

足元からどくどくと液体が吹き出していたことに気がつく。

もう膝まで来ている。

死

脳裏にその文字すら浮かんだ。

どろりとした、青緑の透明な液体。

サデューの、血液だ。
戦いのときに、見たような気がする。
あやふやな記憶だが、そんな気がした。
考えをめぐらせるうちに
もう腰までできている。
何本もの、細いアームがうごめく頭上。
気味が悪い

「はじめるよ」

にやりと、不敵な笑み。

本当に信じてよかったのだろうか

心

それだけに操られては居なかっただろうか

今になって

今になってそんな事が

後悔が

(昴、留美・・・)

襲い掛かってきた。

目の前が全て、青緑の液体で満たされ、

頭までが全て埋もれた。

今ではもう

ケース全体を埋め尽くしてしまった液体。

この状態で、このチューブの働きが止まってしまったら

もし今、ファバロッサがどこかへ行ってしまったら

簡単に死んでしまうじゃないか。

恐怖

今、麻美の心の中にあるのは

後悔

恐怖

不安

その3つの言葉と

愛

それだけだった。

ふと気づけば、そこは濡れたベッドの上。

青緑の雫をたらしている、自分の髪の毛は

銀に近い

青。

長い長い、シルクのような髪の毛。

美しい。

体は、モデルのようになやかなライン

くびれたウエスト

細く長く、形の良い足

すらりとした腕

細い線の輪郭

優しそうでつめたいような、青の目

紅くつややかな唇

ピアス穴の開いた、きれいな形の耳

目の前の鏡により、

自分

生まれ変わった自分を認識した。

人形のようなだった。

と

同時に

ファバロッサが居ない。

どこ？

どこへ？

成功なの？

これでいいの？

聞きたいことは山のようにある。

そして、ふと

気づいた。

「服……！」

裸である。

今、全く何も、身を隠すものはまどっていない。

大人の外人のように変貌した自分に見とれて、いまさら気がつく。

あせっていると

ガチャ

扉の開く音。

「えっ」

今は裸

だれ？

誰なの？

見つかる

どこかに隠れないと……

「麻美ー？目を覚ましたのー？」

「ファバロツサ……」

なんだ……

よかった……

彼女の手にはぶら下がっている、大きないくつもの袋。

「なに？それ……」

「あー、これ？普段アンタが着る服よ。あと、名前。変えないとい

けないでしょ？」

「え、なんで？」

「なんで？じゃないよー。その見た目で麻美は無いでしょ。」

「あ、そっか。」

そんな簡単な事か。

サデューの決まりとか言ったら、ちょっと嫌だったかも。

「名前……ねえ……」

ファバロツサなんて名前は嫌だ。

ううん……

麻美、か……

確かにこの見た目には合わないよね。

mami……

mmとかはどうだろう。

まみむめも……

!!

「マザー・ミユール……とか……?」

「mを頭文字にしたいわけね。確かに、マザー、なんとかはいいかも。でも、ミユールは……」

女性の履物の名前だなんて……足の下にあるもの……

突っ込まれた。

マザー・メリー

私の名前はマザー・メリー。
母親は、ファバロツサ。

サテュー vs サテュー (後書き)

続く。

マザー・メリークリスマス？（前書き）

マザー・メリー

雪の降る街

聖夜にふさわしくない彼女は

メリークリスマス

呟いて

憎悪と哀しみを届けに来たんだよ。

マザー・メリークリスマス？

マザー・メリー

その名前は、まだ昴たちの知らない私の名前。
元、大橋麻美、現、マザー・メリー

いつだって、幸せと自由を求めていた自分が、
今、憎しみと悪と哀しみの化身になっている。
今日はクリスマスイヴ。

聖夜の空から降り注ぐ白い愛。

男女は仲良さげに、幸せを振りまきながら集い。
子供達のはしゃぐ声は、時間がたつにつれて熱気を増し。
そして、クリスマスイヴの夜一人ぼっちの男どもは

憎悪にまみれていた。

「この眼は、すごいよね。何でも良く見える。」

マザー・メリーが生まれた日は、実質12月23日。

でも、マザー・メリーという名の付いた日が今日、クリスマスイヴ。
そう。

2つ目の誕生日。

その日彼女は、ある女と一緒に秋葉原を見下ろしていた。
女の名前はファバロッサ。

明るさを増す町並み。

幸せや赤いおじいさんを待つ期待にあふれる中
マンションの一室

一軒家の一室

漫画喫茶の各部屋から・・・

むさい男の熱気とともに、たくさんの哀しみ
憎しみ・・・

その憎しみを、愛し、愛でる彼女達（？）は
美しかった。

「でしょう？その目は、すごく、愛したいと願っているでしょう？」
「いいえ。私が愛したいと思っていないから。願っていないから。」
二人の会話は、まるで周囲の人間には理解できない。
だって彼女達は

人間じゃあないんだもの。

その夜に、メイド喫茶、漫画喫茶などの場所に散らばる
『中年ヒツキー&ニート非リア充』的なおっさんや青年達が、続々と姿を消した。

切り裂き魔や、無差別殺人などとは違う。ただ単に、

『存在意義に疑問を感じている者』が姿を消す。それだけだった。

さあ、クリスマスの夜の街
聖者の行進だ。

オタクまるだしの男

チャラ男

ニートっぽい男

顔乙な男

明らかに昨日失敗した男
などなど。

種類はさまざまだが・・・

心に隠し持つ哀しみはどれも同じ。

その

その哀しみを吸い尽くすためならと。

彼女達は微笑む。

男達が魔法陣の中に集まった時

彼女たちはパチンと指を鳴らした。

儀式が始まった。

いつせいに響き渡る悲鳴

キヤー、などといったものではない。

がああ、とか、中年のおっさんのうめく声だ。

いつせいに影を大きくしてゆく者達

その姿はまるで獣、いや化け物。

むしろ、肉の塊ともいえる。

「ほら、こんな風にできるのよ、サデューってのは。私の趣味じゃないのよね。」

サデューの大量発生警報が、昴たちのいる世界に響き渡った。

『コス戦士昴』の耳に届いた声。

戦場にひびきわたる笑い声。

それは……

麻美の泣き声のようだった。

マザー・メリークリスマス？（後書き）

昴「なんかまみの泣き声みたいじゃない？気のせいかな？」

留美「え？笑い声だったじゃん。」

昴「そうだけど・・・」

麻美（前書き）

マザー・メリーはクリスマスの夜
聖者の行進をはじめました。

麻美

続々と歩いてゆく男達。

向かったのは、ファバロッサの部屋。

私が生まれた場所。

あのガラスケースに次々に入ってゆく男達。

ケースを閉めた瞬間目が覚めたらしい。

「おい、えっ！？おい！何、何コレえっ！？え！？」

「まてまて・・・何この展開・・・」

意味が分からない・・・

だが

容赦なくファバロッサは

機械を起動させた。

私の時のように呼吸器のようなものは無く。

ただ液体につけられてゆく。

まるで、虐殺・・・

窒息死するのではないか。

むしろ、溺死・・・

だが

一瞬の激しい閃光で、彼らは

大量のサデューと化していた。

「えっ？」

「すごいでしょ、コレ。あなたの時みたいに容姿は関係ないから。」

ガラスケースの中でうごめくサデュー！

生ごみの塊にも見える醜さ。

「じゃ、転送しまーす」

気の抜けた声でファバロッサは言った。

ボタンを押すと

一瞬で彼らは消えていた。

「大量生産完了つと。」

聖夜にふさわしくないほどのサデュー。
今、いつせいに人間界に降り立つ。

麻美（後書き）

短くてすいませんm
—
—
m

虐殺の聖夜

大量のサデューは、人間界へ放たれた。

コスプレ戦士はそこへ集い、次々にサデューを打ちのめしていくのだ。

だが量がおおいせいで、相手側の体力はどんどん落ちる。

その様子を見ながら、ファバロツサは呟いた。

「そんなに乱暴にやったら、負けちゃうに決まってるでしょ」

彼女は確信を持っていた。

コスプレ戦士は、今夜敗退すると。

だが

「え、え、どうなつて、！？何あいつ！？え！？」

急に冷静さを失ったファバロツサ。

何事かと、街を見た。

「……！……昂……留美……」

かつて仲間だった彼女達。

冷静に、サデューを倒している。

お互いのフォローをして、二人で一匹を袋叩きにして……

二人分の圧力で負けたサデューは、人の形に戻っていく。

元いた場所へそれぞれ帰ってゆく。

いつの間にか、サデューの残りは少なくなってきた。

それでもまだ、昂たちは戦っていた。

そこで、

追い詰められたファバロツサの発した言葉は

私を支配する。

「……メリー……マザー・メリー」。

やっとおしまい！」

「……え……」

体が動き出す。

何も分らない。

なぜ？

自分じゃないものが、目の前に

眼球に張り付いているような錯覚。

今、私の意志はない。

昴が目の前にいる。

ああ、殴らないで、痛いよ。

切らないでよ、血が出る。

燃やさないで、熱いよ。

でもどうして？

私じゃない私は、

逃げない。

笑っている。

なんで？

どうして？

戸惑う私

本当の私。

戦う、私じゃない私。

どうしたらいいの？

もう

だ

め
・
・
・
・
・
・

そして昴たちは知ってしまった。
その、ボスとして自分達が今戦ったサデューの元の形が、
「麻美・・・」

自分の仲間だという事実を。

サデユー一図鑑(前書き)

番外編

サデュー図鑑

サデューの仕組みについて、詳しく(?)書いてみたいと思いました。

・一般型

人間の哀しみ、憎しみなどの感情が涙となって零れ落ちた瞬間に、ウラの世界で生まれる。

見た目はさまざまで、哀しみが大きければ大きいほど体の大きいサデューが生まれ、

憎しみが大きければ大きいほど強く、経験値がおおくなる。

・一般型(B)

特別な場合、嬉しさなどの幸せな感情を含む涙の場合は、ピンク色のふわふわとしたものが生まれる。

そのような形のもは特別に経験値が高く、勇者に危害を与えない。だが、サデューの一般型とリーダー反応が全く変わらないので見分けにくく、

HPの少ない勇者などには避けられることも多い。

・ファバロッサ(特殊型サデュー：時兎)

特別に、サデュー界の王自ら作り上げた、初の女形のサデュー。

形は美しいが、変化の能力を持ち合わせており、男にもなれるので両性型だ。

普段はファバロッサと名乗ることはない。

サデューの勧誘に失敗した場合は、サデューに襲わせてもみ消すということも。

時兎型という種類で、人間の過去が分かることや、心が読める特性がある。

・マザー・メリー(特殊型サデュー：夜乙女)

もとは、大橋麻美という厨二病の少女だったが、ファバロッサの手

により、

特殊型のサデューへと変化した。

この章まででは、まだ人間だった頃の記憶や感情は薄く残っている。夜乙女型という種類で、夜に女というわけではなく、眠る時には人間だった頃の形状に戻り、

記憶も全て人間だった頃のものが戻るといふ特殊型。

サデユー図鑑(後書き)

短いですが、次に書く番外編では『コス戦士特集』をやります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9769w/>

厨二病魔法少女

2011年12月11日20時51分発行